



敷島南小学校
学校便り NO.16
令和5年11月
学校長 五味 正年

保護者観覧の音楽会 4年ぶりの開催

1月15日には、4年ぶりに保護者の皆様に会場に入らせていただき、音楽会を観覧いただきました。この日は、インフルエンザなど感染拡大防止のため、窓を開けての開催でした。少し寒い中でしたが、多くの保護者が参観してくださり、大きな拍手で子どもたちに励ましをいただけたことは大変嬉しかったです。

さて発表はというと、どの学年も工夫を凝らし発表をすることができていました。低学年は、かわいらしさや元気さで、とてもいい発表ができていました。2年生は、合唱曲「ドレミの歌」に合わせて自分たちでつくった絵のプラカードを合わせて動かすところが、とても良かったです。1年生は、本当に元気いっぱいの歌と、ピアノで「キラキラ星」の演奏でした。「もうこんなに吹けるようになったんだ。」と感心しました。



中学年は、合奏の幅が広がり、いろいろな音が混じり合い、良い響きで演奏をしていました。3年生は、新たな学年になって習い始めた楽器リコーダーの演奏でした。「わになって」や「ちょうちょ」では、先生の指揮をしっかりと見て、揃った演奏ができていました。良い音色も出ていました。4年生は、合奏曲「ドンマイ」は、徐々に楽器を増やしていきながらの楽しい演奏でした。だんだんと迫力が強くなっていくのと同時に、替え歌で日常について歌っていたのは面白かったです。

高学年はやはりお兄さんお姉さんだけあって、合唱も、合奏も抜群の腕前でした。5年生は、合唱曲「翼を抱いて」は、音程はさることながらハーモニーのすばらしさも光っていました。また、合奏「キリマンジャロ」では演奏時間は短いながらも、迫力のある演奏でした。6年生の演奏した曲「木星」は、イギリスの作曲家 グスターヴ・ホルストの有名な楽曲です。いろいろな楽器を使い演奏されていましたが、特に、主旋律のリコーダーの響きがよく、壮大な宇宙をイメージさせてくれました。合唱「瑠璃色の地球」では、きれいな声で響かせるハーモニーは、さすが6年生と唸らせるものでした。



ては、音程はさることながらハーモニーのすばらしさも光っていました。また、合奏「キリマンジャロ」では演奏時間は短いながらも、迫力のある演奏でした。6年生の演奏した曲「木星」は、イギリスの作曲家 グスターヴ・ホルストの有名な楽曲です。いろいろな楽器を使い演奏されていましたが、特に、主旋律のリコーダーの響きがよく、壮大な宇宙をイメージさせてくれました。合唱「瑠璃色の地球」では、きれいな声で響かせるハーモニーは、さすが6年生と唸らせるものでした。

どの学年も、発達段階にあった発表で、学年らしい表現ができていたと思います。保護者の皆様にも、「5年生や6年生になると、こんなにも上手になるんだなあ。」と感じていただけたことと思います。また、保護者の皆様には、どの学年にも、惜しみない拍手をいただきありがとうございました。とても励みになったことと思います。

「言葉の伝え方」の大切さ

私は、子どもたちの前に立って話をするとき、子どもたちにわかりやすく、興味をもって聞いてもらえるよう、前もって考えてから話をするようにしています。時には長くなってしまい、飽きてしまうこともあるかもしれませんが、子どもたちがそれを聞いて興味が湧いたり、頑張ってみたくなったりしてくれると、本当に嬉しいです。

逆に、言葉の使い方によっては、誤解を招いたり人を傷つけたりするものにもなりかねません。私たち教師は、「言葉遣い」について、しばしば子どもたちに話をします。「ふわふわことば」（言われると、気持ちよくなる言葉）と「チクチクことば」（言われると嫌な言葉）など、雰囲気合う例えを使って教えたり、子どもたち自身に判断させたりすることがあります。どんなときにそのように感じるのか、子どもたちにも気持ちを連想させながら、言葉の大切さを伝えるようにしています。

つい先日、山梨県警察本部から出されている『少年』10月号を読みました。その中には、「第41回少年を非行から守る中学生防犯弁論大会」で、最優秀賞になった生徒の作文「心を繋ぐ言葉遣い」が掲載されていました。次の文は、その中の一部です。

中略・・・・・・・・・・・・・・・・

私も時折「親しいから。」とふざけながら悪口を言うてしまうことがあります。ただ、言われた側には言葉のナイフとして突き刺さり「冗談だと分かってくれるだろう。」という安易な判断や意識の薄さが、人の命をも奪うことに繋がる事。時には「すれ違い」や「誤解」が生まれる事。言葉は使えば伝わるのではない。私は「ことばの伝え方」ということをもっと重く捉えるべきだと感じました。

・・・・・・同じ心に届く言葉なら、優しさや相手を尊重する言葉であって欲しい。そっと手を差し伸べ、再び前を向ける力となる言葉でありたい。その時、その相手や目的、時と場に応じて言葉を遣い分けれる力を大切にしたい。

身近な生活のいたるところで存在するいじめや誹謗中傷。その言葉のナイフが優しく相手を包み込むものとなるように、私達は今一度、言葉の持つ力を信じ、心と心を繋いでいくことが必要なのではないのでしょうか。「心を繋ぐ言葉遣い」それが、今よりも、より良い友人関係や社会を創る第一歩なのではないでしょうか。

この中にもありますが、どんなに親しい間柄でも言葉を発する側と受け取る側では、いつも同じような気持ちでその言葉を受け取っているとは限らないのです。受け手の取り方によっては、時には誤解が生じてしまうことも考えられます。

しかし、誰もが聞いていて前向きになれる言葉や優しさのある言葉は、受け取る側からしたら自分を傷つけるために言っているのではないと感じることが多いはずで。そこには、その人のことを考えて発信した言葉なので、優しさや熱意が感じ取れるからだと思います。全ての子どもたちも、こんなやりとりができるようになってほしいと願っています。私たち大人は、普段から「言葉の伝え方」を意識して、子どもたちと接していくことが大切だと考えています。

これからも、子どもたちに、相手のことを考えた「言葉の伝え方」の大切さを話していきたいと思えます。